

学部・研究科名 生物産業学部

学部長・研究科委員長名 吉田 穂積

学科名・専攻名 北方圏農学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	分子から生態系まで 作物・家畜から野生動植物まで 基礎から応用までの幅広い知識を実践的に学ぶことができることが本学科の特徴である。これらを無理なく学ぶことのできるカリキュラムを配当している。	・各教員における講義毎の見直し ・講義毎あるいは定期的な受講生からのコメントの回収と分析 ・オンラインツールやオンデマンド教材を使用したインタラクティブ講義の工夫。 ・授業評価の実施と結果の分析 ・学科独自内容のリメディアル教育	・学則とシラバスに基づき、教員各個人が適切な評価を行っている。 ・学務の方針に基づき、評価とその報告をもれなく行っている。 ・学生からの「成績相談」に真摯に対応している。	・前期と後期に1回ずつの個人面談を実施し、個人の目標設定を補助。 ・定期試験や課題による評価。 ・欠席多数になった学生がいた場合、毎週の会議において報告・共有し、担任を中心に連絡をとり必要であるならば保護者に連絡をしている。	・新カリキュラム制定に向けて、抜本的な見直しを行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・高校のカリキュラムに依存せず、自分の興味を発展できる	【長所】 ・学生の資質に配慮した講義	【長所】 ・適切である。	【長所】 ・学生の質の担保 ・学生の満足度向上	【長所】 ・学生にとって負担が少なくより理解度の高い授業構成となる予定。
	【特色】 ・卒業研究に必要な専門性の高い知識を得るための導入となる。	【特色】 ・自身の講義の質向上に工夫をする教員が居る。	【特色】 ・適切である。	【特色】 ・教科担当と担任が連携したきめ細かな指導。	【特色】幅の広い内容をカバー 分子から生態系まで 作物・家畜から野生動植物まで 基礎から応用まで
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・複数教員が担当する実験、実習では評価の集約（学期末）まで学生の問題点が明確にならない場合がある。	【問題点】 ・授業数のバランスに配慮する ・分野間の授業数が学年ごとにやや不整合がある。
	【課題】 ・なし。	【課題】 ・なし。	【課題】 ・卒業年次における単位取得に無理がないように、3年次までの成績指導と学生の意識向上を喚起する。	【課題】 ・教科によっては期末評価に頼らず、中間評価で成績不振学生を指導する	【課題】 ・より良いカリキュラムとする。
根拠資料名	・シラバス ・カリキュラムツリー	・シラバス ・授業評価アンケート結果 ・自己点検・ベストティーチャー賞	・各授業の成績・出席記録 ・実験・実習の記録 ・テストおよびレポートの記録	・各授業の成績 ・実験・実習の記録 ・テストおよびレポートの記録 ・成長の記録（カルテ）	・学科会議資料

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・アドミッションポリシーは「大学案内」およびウェブに公開している。 ・キャンパス説明会等においてアドミッションポリシーを説明している。 ・推薦系入試の小論文出題においては、アドミッションポリシーに基づいた出題とし、その理解度を口頭試問において問うている。 ・入試について事前に会議で確認し当日の面接は2名で行っている。 ・（公正性）入試結果は学科合否判定会議において報告と共有し、公正性を保つように配慮している。	・入試制度については毎年度点検している。 ・会議において入試毎に事前・事後の話し合いをもっている。 ・入学受験制度別に入学者の成績の追跡を行い、検証している。 ・入試候補を含めて学生受け入れについて学科メンバーの意見交換が活発になされている。 ・学科入試対策委員会を設置した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・入学に際し学科の特徴をよく理解して志望する機会を与えている。 ・入学後に自学科と志望のずれがなく、目的をもって大学生活を送ることのできる学生を増やす効果が期待できる。	【長所】 ・情報の共有と意見交換がなされている。 ・入試制度と入学後の成績を追跡して検証している。 ・学科入試対策委員において学科の入試対策について様々な提言がされている。
	【特色】 勉強だけでなく、キャンパスの地域特性に合った学生の資質を評価すべく工夫している。	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・農学全体の受験者数減少対応が必要であり、年内入試受験者の動向を早めに把握する必要がある。	【問題点】 ・多様な入試制度は入学した学生の学力差や意識の差をもたらす可能性がある。
	【課題】 ・入学受験制度別に入学者の成績の追跡を行い、検証していく。	【課題】 ・入学後のリメディアル教育の充実
根拠資料名	・入試合否判定内部資料 ・大学案内	学科会議資料 学科入試対策委員会資料 学部入試対策委員会資料

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・現編成については「学部・学科・課程紹介」に記載。 ・方針については学科教授会メンバーに開示しているのみ。 ・編成方針に従来と変更点はない。	・教員配置は前年度と変更がない。 ・教員の年齢や職階について定期的に確認を行い、特に若手研究者の研究実績向上を意識した補職選定等の編成に努めている。	・年度初めに学科教授会において昇格人事を検討し、方針を見直している。 ・今年度も1件の昇格人事を行った。 ・教員定員は充足しており、退職による欠員はないため、募集・採用はない。	・依命国外留学制度への応募意識を醸成。 ・様々な委員を経験し、大学人としての職務経験を積むように、各種委員や担当を交代で担当するように配慮。 ・業務が過重にならないように分担を配慮。 ・学科業務に時間が割かれ、資質向上に関する努力は個人に任せているのが現状。	・年齢構成が安定した組織であるため、大幅な見直しはない。 ・昇格目標にあわせて業務分担を見直している。 ・健康面など業務上配慮すべき状況をくみ取り、配慮するように努めている。 ・所属長による出勤状況の把握。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特にない	【長所】 ・特になし	【長所】 ・成熟した組織としての安定感	【長所】 ・特定の個人への業務集中を避ける意識がある。	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特にない	【特色】 ・特になし	【特色】 ・成熟した組織としての安定感	【特色】 ・特になし。	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・今のところ生じていない。	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・学部の補職との整合性と、学科運営時に必要な人事構成のバランス取りが難しい。	【問題点】 ・入試業務の大幅増とコロナ対応等学生指導業務の増加により組織の疲弊が感じられる。	【問題点】 ・個々の教員の自己実現をサポートする組織体制がない。 ・点検・評価は所属長の努力に任せられており、大学組織としてのスキームや、評価の制度はない。
	【課題】 ・学部・学科構想	【課題】 ・学部と学科の補職に適合する人材の調整が難しい。	【課題】 ・昇格候補者のサポート ・学部や学科の将来構想へ向けた連携が必要である。	【課題】 ・教員の質向上には、インプット（勉強会や教員間の交流）が必要。 ・業務量が多く圧迫されている。	【課題】 ・個人の努力において組織が維持され中長期的な展望はない。
根拠資料名	学科教授会資料	学科教授会資料	学科教授会資料	学科会議資料	WEB出勤簿による勤怠管理

学部・研究科名 生物産業学部
学部長・研究科委員長名 吉田穂積
学科名・専攻名 海洋水産学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	編成できている。 しかし、新たな教員を迎えて、より適切な体系の模索が必要。	講じている。昨年度のコロナ禍で本年度は対面授業のありがたさを感じた教員が多い。	ほぼ行っているが、一部の科目では多面的な評価ができていないものもある。	ほぼ行っているが、一部の科目では多面的な評価ができていないものもある。	学科をあげて取り組んでいるが、コロナ禍で改善が十分とは言えない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 ・なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・教員の職階の適切性	【問題点】 コロナ禍でオンライン教育のハード面、ソフト面それぞれ未完成	【問題点】 一部に多面的な評価ができていない科目がある	【問題点】 一部に多面的な評価ができていない科目がある	【問題点】 見直しが不十分
	【課題】 ・教員の昇格の推進	【課題】 オンラインでも充実した授業などの実施	【課題】 多面的な評価とシラバスの見直しなどを行い、適切に評価する	【課題】 多面的な評価とシラバスの見直しなどを行い、適切に評価する	【課題】 教員の充足を待って、あるべき教育内容のブラッシュアップ
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	制度や体制を適切に整備しており、公正に実施している。	適切性について定期的に点検・評価を行っている。今のところは問題無し。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・農学志望者が減少しているため、入学者確保が困難になりつつある。	【問題点】 ・今後の農学志望者の減少状況
	【課題】 ・志願者の増加、入学者の増加	【課題】 ・志願者の増加
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学科会議などで議論、周知している	枠取りなど必要性に応じて実施している	適切に実施することを周知している	様々なFD活動に積極的に参加して、教員個人の資質や組織の改善につなげている	教員組織の適切性について点検・評価を行い、結果を受けて改善・向上に取り組んでいる
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・昇格に対する組織と個人の認識の相違	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・昇格に対する積極性がない教員がいる	【問題点】 ・より深く実施する必要がある	【問題点】 ・教員の急逝など、予期せぬ事がある
	【課題】 ・継続	【課題】 ・継続	【課題】 ・昇格を望まない教員への対応	【課題】 ・FD活動のみならず、教員個人の資質や組織の改善に取り組む	【課題】 ・定期的に実施すると共に、アクシデントにも対応できる体制とする
根拠資料名					

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田穂積

学科名・専攻名食香粧化学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	① 教育課程の編成・実施方針に則り、整合性に留意しつつ教育課程を組み立てている。具体的には、基礎的・基盤的知識の修得と食・香り・化粧に関わる実践的な専門科目を体系的に学ぶため、「総合教育科目」、「外国語科目」、「専門教育科目」の三つの科目区分により授業科目を配当している。 ② 教育課程編成にあたって順次性・体系的性について、カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの対応図を作成し、配慮に努めている。 ③ 単位認定、シラバス・チェック、欠席者のフォローアップ等については、教員間の情報交換を密に行いつつ、適宜学科会議で議論している。例えば教務課からの伝達事項を回覧し、その場で改めて確認する。あるいは評価に関する意見交換を行うなど、学科としての意思統一を図っている。（<u>学科会議資料</u>、教員ポータル等）。 ④ さらに授業内容については、各授業で到達すべき内容と項目の設定について学科カリキュラム検討委員会で実施し、学科会議を通じて各教員に配信し、これに基づくシラバスを作	1、2年生においては、カリキュラムの他に特別プログラム（<u>学科プロジェクト</u>）を準備し、希望者のみが参加できるようにすることで、学生の主体的な学びを促している。また、そのプログラムからの成果物（例えば学生ワイン）を発表することで、学生の学びへのモチベーションを刺激している。また、学科卒業生を含む一線で活躍する社会人を外部講師として活用し、新しいものの見方の教授やホンモノに触れる機会を設定している。学生コスメプロジェクトでは、ハマナス果実の免疫賦活作用を明らかにした大学院生の研究成果を化粧水に活用して商品化したのに続きクラウドファンディングを活用したハンドクリームの作成にチャレンジしている。学生アロマプロジェクトでは、香料会社OBを講師に招き。学生に香りの創作活動に取り組む機会を提供し、学生の調香ニーズに応えている。 3年生においては、早期の研究室配属活動およびゼミ発表を促すことで、卒業論文に関わる実質的な時間を増やしている。客員教授や民間企業の外部講師による実践的授業を設定し、実学に配慮した講義を行うと共に就職活動への意識付けを行っている。	成績評価においては、シラバスおよび初回の授業において、評価基準を明確に提示している。また、試験後に成績質問期間を設けることで、学生からの評価に対する質問に対して答えている。 学位授与においては、学科にて卒業判定会議を開催し、厳格な判断により学位を授与している。	日頃の研究室での様々な活動時における学生・教員間による交流および、卒業論文中間発表ならびに卒業論文審査を通して、ディプロマ・ポリシーに見合う学習成果を適切に評価している。また、問題があった際には、学科会議を通して学科教員全員に周知することで、情報共有と早めの対処を行っている。	大学指定の授業評価アンケート、卒業時アンケートおよび学科が独自に準備したアンケート（6～7回目の授業で実施）等により、学生からのフィードバックを受け、その結果を学科会議や <u>学科内カリキュラム検討ワーキンググループ</u> において議論することで、改善及び向上に向けて取り組んでいる。

	成している。学生の修学・生活状況などについての共通認識を持つべく努力している（教員ポータル等） ⑤ 授業科目の位置づけに関しては、カリキュラム・ポリシーに則り、学科会議で合議により設定してきた。 ⑥ キャリア教育に関しては、特に1年次よりビジネスマナー講座を必修で設けると共に、特別講義並びに演習を通じて各界のトップランナーに触れ、一緒にワークを通して学ぶ機会を積極的に取り入れている（<u>演習予定表</u>）。希望する3年次に対しては就職対策委員が、独自の対策講座を設定し、個別面接を実施している。 ⑦ 学科専門科目のカリキュラムツリーを作成し、食香粧化学概論においてツリーを提示し学習領域と科目の関係性を解説すると共に、学びとキャリアへ連関について意識付けを学生に行っている	4年生においては、定期的な中間発表等を通して卒業論文の指導を綿密に行うことで、学生の知的好奇心を刺激している。 また、国際的な感覚を学生が涵養できるよう海外から一流の研究者を招へいし、講義できるよう取り組んでいたが、新型コロナ感染蔓延により停止中である。			
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・「総合教育科目」、「専門教育科目」のいずれにおいても、自然科学から食香粧の幅広い分野を、基礎から応用に至るまで段階的に着実に学ぶことができる。	【長所】 1年次から実習科目を多く配当し、座学と実習（体験型）を連動させることで、座学で学んだことをすぐに実習等を通して体験できるようにしている。	【長所】 なし	【長所】 授業開始3回目および8回目での欠席者洗い出し等、丁寧な学生指導により、問題点の早期発見と対処が出来ている。	【長所】 なし
	【特色】 ・1年次から実習科目を多く配当している。特に体験的な実習は、実学への気付きとキャリアを意識した動機付けに役立つ。また3年次には原理を理解する実習を設定し学位課程に相応しい体系を編成している。	【特色】 1、2年生は特別プログラム（学科プロジェクト）によって、研究室に入る前から様々な研究活動を体験できる。	【特色】 学位授与について、学科教員全員により判定（学科会議）が行われている。この結果、単位付与に際し科目責任者が独自の判断をすることを防げる。	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 業務多忙につきカリキュラム検討等の打ち合わせ時間が確保しにくい問題があるが、専任教員数の適正化が図られつつあるので解消が期待される。

	【課題】 ・学生周知の継続性。学年毎に体系周知を繰り返し定着させる必要がある。	【課題】 特別プログラムに関わる教員の負担軽減。特別プログラム参加学生の学習効果の計測。新カリにおける特別プログラムの正課授業への落とし込み。	【課題】 学科 DP に照らし合わせたブレない単位付与を学科が主体となり取り組む仕組みの徹底の継続。	【課題】 成績不良者増加傾向への対応。	【課題】 業務のスリム化 アンケートの継続性
根拠資料名	シラバス 学科会議議事録 学科パンフレット	大学ニュースリリース 学科 SNS、各プロジェクトの SNS	学科会議議事録	学科会議議事録	学科カリキュラム検討委員会議事録 学科会議議事録

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッションポリシーに基づき、生物資源や地域資源を活用する食香粧化学に関心があり、社会貢献に対する強い意欲のもとで、自発的に取り組める学生を求めている。そのため、テストの得点だけで判断する一般入学試験だけでなく、面接を通して人物像を理解できる推薦試験にも力を入れており、現在は生物産業学部全体で一般推薦、指定校推薦の他に、大自然に学ぶ北海道総合型選抜、私の夢北海道総合型選抜のように多様な推薦試験を行うことで、アドミッションポリシーに合致した多様な学生を受け入れることを試みている。推薦系入試合格者には入学前教育の一環として、全員に香りキットを送付し、学科教育に関わる内容への気づきを促進している。また、学科教員全員で入試判定会議を行うことで、公平かつ客観的な入学者選抜を実施している。	幅広い入試制度により多様な学生を選抜していることから、定期的に入試制度毎の学生のGPA把握と必修科目への出席状況把握を行い、学科会議を通して学科教員に周知を図り、必要に応じ指定校の見直し等を行っている。学生の成績を含む個人データを学科 mydisc に保管し、教員が最新情報にアクセスしアップデートできる環境を整えている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・本学科の特色である香り、化粧に興味がある学生を、多く集めることができている。	【長所】 ・指定校の定期的な見直しにより、指定校入試で入学した学生の質が向上し、一般入試入学者よりも高い成績の者が増加している。総合選抜入試にも指定校入試の評定に満たない生徒が受験者の半数を占めており、指定校制度と総合選抜との間でよい連関が出来ている。
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・一般・共通テストでの受験生確保が厳しい。年内入試で8割以上確保する必要がある。	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・高校生が Web 検索で見つける以外に、学科の全国周知、広報。企業との共同研究を進め耳目を集める必要がある。	【課題】 ・年内入試での受験生獲得の必要性から、指定校の拡大により指定校レベルが低下傾向にあり、上位校の取り込みが相対的に低くなっている。
根拠資料名	学科会議議事録 入試判定会議資料（入試選考会議資料）	卒業時成績表（GPA 値）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	「設置の趣旨」に記載されている教育課程の編成の考え方及び特色に基づき、体系的に編成している。	以前は食品科学科であったため、食品を専門にする教員が多く所属していたが、現在は「食香粧化学科」の設置の趣旨に基づき、香りおよび化粧を専門とする教員の採用を積極的に行うことで対応している。 令和元年度の採用活動により若手教員 2 名を採用できたので、教育環境の改善と既存教員の負担減が期待できる。更には残り 1 枠の教員を充足させた。	学科専任教授会を随時開催し、募集、採用、昇任の方針について議論している。	教学 FD 委員会で話し合った内容を学科教員にフィードバックすることで、改善すべき点について共通理解を図っている。 学科独自の授業アンケートを授業 6 ～ 7 回目で実施し、その結果を速やかに学科会議でフィードバックすることにより、授業評価の透明化と改善スピードの加速化を図っている。 学会研究会等への参加を促し、最新の知識・知見の授業へのフィードバックを奨励している。	学科教授会を随時開催し、現在の組織の妥当性の評価を行うと共に、今後の方針について議論している。特に受験生確保を喫緊の課題として位置づけている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・民間企業との共同研究の促進に繋がる。	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・枠を充足させたものの、教授 1 名が世田谷や異動したため、再び 1 枠の欠員となった。	【問題点】 ・地理上の問題から学科に適した人材の確保が困難。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・速やかな教員の補充	【課題】 ・適正ある人材のスкауティング	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	改組関連書類、人事申請資料	改組関連書類、人事申請資料	学科専任教授会議事録	学科会議議事録	学科専任教授会議事録

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名自然資源経営学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学部の共通科目とともに、実学を重視した専門教育科目の体系的なカリキュラム作成を目指している。	学科の教学WGが定期的に会議を開催し、学科会議で報告し、様々な措置を講じている。 1 年次はテキストをベースに、レポート作成とプレゼンテーションの基礎を習得する。2 年次より卒業論文作成に向けた専門的な教育指導を受けるためにゼミ選択を行うことができる。	成績評価は、シラバスに評価基準を明示し、定期試験等の適切な方法で習得状況を確認し適切に単位認定している。また、科目ごとに成績相談期間を設け、学生からの成績評価に関する質問に応じている。	卒業論文指導は研究室（ゼミナール）の教員ごと適切に行っている。 3 年～4 年次生に、前年度の卒業論文抄録集を配布し、卒論指導の一環としている。 今年は2 日間かけて全員が卒業論文の発表会を行った（コロナ対策としてオンラインでの実施）。	学科の教学WGが定期的に会議を開催し、その内容を学科会議で報告し、取り組んでいる。 今年から成績および SP 対策 WG を新たに立ち上げて、成績不振学生の対応や留年学生対策を講じた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 基礎的科目から専門科目まで総合的・体系的な履修ができる。	【長所】 2 年次から早期に専門的な教育指導を受けることができる。	【長所】 なし	【長所】 1 年生～3 年生も参加することで卒業論文に対してより緊張感を持って取り組める。	【長所】 SP 入試学生の成績把握と成績不振学生の把握ができる。
	【特色】 オホーツク地域の自然環境や研究フィールドを活かした授業科目があり、文理融合の教育が実践できる。	【特色】 1 年次から少人数のゼミナールを開講し、細やかに学生教育をしている。	【特色】 なし	【特色】 複数の教員によるコメントがあることで、研究内容の適正化を図ることができる。	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 自然資源経営学実務演習のプログラム数が増える傾向にありカテゴリー分けなど体系整備が必要である。	【問題点】 各ゼミナールの活動内容や成果が見えにくい。2 年次のゼミ選択のミスマッチを防止する。	【問題点】 学生から成績評価についての質問があった。	【問題点】 卒業論文指導において教員による個人差が見られる（抄録集の記載内容）	【問題点】 4 年生の留年者が多くなっている。
	【課題】 自然資源経営学実務演習を体系的に整備する。	【課題】 ゼミナールの研修内容や学習成果をプレゼンテーションする機会を設ける。	【課題】 学生からのクレームや意見に対する受け止めと対応	【課題】 3 年生には卒論構想発表会、4 年生には中間発表会を新たに実施する。卒論ルーブリックを導入する。	【課題】 c-learning 出席管理を効果的に用いた学生の出欠把握や早期対応を行う。
根拠資料名	履修のてびき・講義要項（シラバス） 戦略企画委員会会議資料	学科会議資料	講義要項（シラバス）	卒業論文抄録集	学科会議資料

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特に推薦系（自己推薦型）の入試に際しては、アドミッション・ポリシーを踏まえた小論文から事前課題（800 字程度）へと変更し、面接時にも「生物産業の持続的発展や自然環境との共生に関心を持ち、明確な問題意識と強い学修意欲を有している」等、主体的に学修できる人材か確認した。また、評価の基準を示した用紙を担当教員に渡し面接担当によって評価のばらつきがないように取り組んだ。	学科会議において、学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っている。その結果を受け、改善・向上に向けた取り組みを行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 複数の推薦入試において面接を実施することにより、受験者の問題意識や学修意欲、人物等を勘案した入学者選抜ができる。	【長所】 特になし
	【特色】 なし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 指定校推薦入試の可否に関して高校側と協議をする場面があった。
	【課題】 なし	【課題】 指定校との信頼関係の構築が重要である。
根拠資料名	評価基準 各入試の募集要項（大学ホームページ）	入学者としての要件

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	分野及び研究室の特色を示し、学科会議等で検討をしている。 教員募集の際には学部・学科の方針を踏まえた内容を提示している。	分野・研究室の特性や教員の年齢構成・専門分野を考慮し教員配置を行ってきたが、現状の2分野5研究室体制において、ややアンバランスが生じており、将来的には1研究室3名体制を考慮した2分野4研究室体制への移行を検討している。	教員採用は一般公募として、大学のホームページ、JREC-IN で募集情報を掲示している。 昇格等は自己申請を基本とするが、大学の定める審査基準により公正かつ厳格に実施している。	学生が回答する授業評価アンケートの結果に基づき、各教員が授業改善に取り組む。	学科の人事委員会で人事計画を立案し、これを学科会議等で確認・共有している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 文理融合型教育の実践	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 2分野5研究室体制により幅広く経営学を学ぶことができる。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 2021年度入学者が定員割れしたため、定年退職者の枠取り申請ができていない(学内移動による所属変更は認められた)。	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 2分野4研究室体制における教員組織の編成。	【課題】 なし	【課題】 アンケート結果の反映は、各教員の裁量に任されている。	【課題】 分野・研究室・学科全体でのチェック体制の構築。
根拠資料名	学部・学科・課程紹介 教員公募案内（ホームページ）	学部・学科・課程紹介	資格審査委員会資料	授業評価アンケート結果	学部・学科・課程紹介

学部・研究科名	生物産業学部
学部長・研究科委員長名	吉田 穂積
学科名・専攻名	北方圏農学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②
目 標	■学生と教員間の交流事業 平成 29 年度に実施した 1 年次生の研究室訪問の取り組みを基盤とし、学科や研究室、教員の取り組みや研究について学生に理解を深めさせ、学生に学科のイメージの定着を図ると共に、自ら行動し学ぶ姿勢の醸成と学習意欲の向上を目指す。	■新実験・実習カリキュラムの完成年度へ向けた内容の充実 令和元年度からの学部・学科改組に基づく改正カリキュラムの運用へあたり、見直しを行った実験科目および実習科目を中心とした現行のカリキュラムの定着をはかる。
実行サイクル	4 年サイクル（平成 30 年～令和 3 年）	3 年サイクル（令和元年～3 年）
実施 スケジュール	<令和元年度> ・研究室訪問の実施方法についての検討（4 月） ・1 年次生への周知と研究室訪問の実施（～7 月） ・1 年次生へのアンケート調査および解析（～12 月）	<令和元年度> ・新カリキュラム実施へ向けた体制の整備と実施内容の検討（～7 月） ・シラバスの作成（～12 月） ・担当教員の決定（～12 月）
目標達成を測定する指標	<令和 3 年度> ・研究室訪問出席者数 ・1 年次生への研究室訪問に関するアンケートおよび感想	<令和 3 年度> ・開講科目表およびシラバスの作成 ・授業評価アンケートによる検証
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ感染対策の一環として研究室への入室を制限したことが一因にあるが、実施できなかった。	令和 5 年からの新カリキュラム実施に合わせて実験と実習内容について議論している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】なし	【長所】より良い実験・実習作り
	【特色】なし	【特色】なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】令和 3 年度に実施できなかった。	【問題点】学部主導型の体験型実習と内容、日程を調整する必要がある。
	【課題】1 年生から研究室の内容を理解させ、卒業研究を意識させることは学習意欲の向上につながる。実施する。	【課題】実験と実習時間の確保
根拠資料名	学科会議資料	学科会議資料

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	■連携協定を活用した研究環境整備 連携協定を締結した農協を中心として、人材育成を考慮した試験研究の協力体制を整備する。
実行サイクル	__4__ 年サイクル（令和元年～4 年）
実施 スケジュール	＜令和元年度＞ ・関係機関との協議（～8 月） ・試験研究実施へ向けた具体的なプラン作成（～2 月）
目標達成を測 定する指標	＜令和2 年度＞ ・関係機関との連携体制プランの作成
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	連携協定を結んだ企業・法人・財団等と共同研究を実施あるいは実習場所として利用している。 一例をあげれば、 JA、農研機構、道総研、前田一步園財団、サッポロビール株式会社との共同研究や活動を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】・大学だけでは得られない環境で研究・教育を実施することができる。
	【特色】・実学に近い
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】とくになし
	【課題】特になし
根拠資料名	各報告書

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	■受験生（学生）確保に向けた取り組み オホーツクキャンパスの地域性および H30 学科名称変更と H31 カリキュラム変更を踏まえ、学部の入試活動との連携を図りながら学科の魅力づくりに取り組む。
実行サイクル	4 年サイクル（令和元年～令和4年）
実施 スケジュール	＜令和元年度＞ ・広報体制の構築とオープンキャンパス等の展示内容の検討（～5月） ・研究室や教員の取り組みについての紹介ポスターなどの作成（～7月）
目標達成を測定する指標	＜令和4年度＞ ・オープンキャンパス参加者数およびイベント参加者へのアンケート ・毎年度の入試志願者状況
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	オープンキャンパスに積極的に参加し、学科独自の取り組みを行った SNS 広報に力を入れた。学科インスタグラム、Face Book を作り、情報発信に努めた 学科教員による高校訪問 51 校 学科教員による高校相談会 14 件 その他：ダイレクトメール発信、ウェブ DM 発信、YouTube チャンネルなどの企画を実施した。カリキュラム、就職に関する説明資料を作成した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】北方圏農学科の活動を様々な層に伝えることができた
	【特色】様々なメディアを使うことで、受験生とその保護者のみならず在校生の保護者からの支持が得られている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】入試広報業務の増加
	【課題】効果の検証。効果的な広報に選択し、労力を削減しないとマンパワーが不足。組織の疲弊を招いている。
根拠資料名	入試対策実行委員会資料 学科会議資料

学部・研究科名	生物産業学部
学部長・研究科委員長名	吉田 穂積
学科名・専攻名	海洋水産学科

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	■教育カリキュラムの深化 今後予定される新たな教育カリキュラムの編成に向けて、特に 1・2 年次にとって魅力のある学科専門分野と学部横断型の学びに重点を置いたカリキュラムを策定する。
実行サイクル	3 年サイクル（平成 31 年～令和 3 年）
実施 スケジュール	＜令和 3 年度＞ ・1 研究室 3 名体制の完成に伴う学科カリキュラムの充実（～3 月） ・学科内での問題意識の擦り合わせ、具体的方針の策定（～8 月） ・大学及び学部のカリキュラム編成方針を踏まえ、FD 委員を中心に学科専門カリキュラムと学科としてあるべき学部横断型のカリキュラム内容の検討（～2 月）
目標達成を測 定する指標	＜令和 3 年度＞ ・基礎実験・臨海実習および海洋水産体験実習のメニューの改訂 ・あるべき学科専門カリキュラムと学部横断型カリキュラムについて問題意識をすりあわせる
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・実験実習のメニューの検討を行った。コロナ禍によるオンデマンド対応や、教員の急逝による新たな教員の専門の不透明性から、十分な議論ができていない。 ・カリキュラムについては、コロナ禍による大学全体のカリキュラム変更スケジュールの変更に伴い、学部カリキュラムのあり方の検討が成されないため、学科専門カリキュラムの検討にとどまっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・新カリキュラムの確定に向けて、学科内での議論が深まった。
	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・大学、学部、学科のカリキュラムの流れが不透明
	【課題】 なし
根拠資料名	学科会議議事録

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	■地域のニーズに則した研究活動の実施 10 年を経過した海洋水産学科では、学科の専門性を活かし、網走市、オホーツク圏、北海道、さらにつながりを持つ海域・地域におけるニーズに応えるべく、教員・研究室それぞれの研究活動の幅を広げ、内容を深化させる。その研究成果を学科の学生教育及び地域・社会等に広く還元する。
実行サイクル	__2__ 年サイクル（令和 2 年～令和 3 年）
実施 スケジュール	＜令和 3 年度＞ ・現在までの具体的取組内容の整理、今後の可能性についての検討（～3 月）
目標達成を測 定する指標	＜令和 3 年度＞ ・地域との共同研究の現状把握、課題の抽出 ・共同研究の開始状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・個々の教員による地域の課題の抽出が行われている。 ・コロナ禍により、従前行われていた研究交流などが制限されたことなどにより、共同研究の開始には至っていない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし
	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 課題の抽出とその解決に向けた方策を策定する方法の模索が必要
	【課題】 十分な研究交流の機会の確保
根拠資料名	

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	■受験生（学生）確保に向けた取り組み オホーツクキャンパスの地域性及び今後予定されるカリキュラム変更を踏まえ、ディプロマポリシーに沿った高い目的意識を持つ受験生を確保するため、大学・学部全体による広報・募集活動に加えて、積極的な取り組みを展開する。
実行サイクル	__3__年サイクル（令和元年～令和 3 年）
実施 スケジュール	＜令和 3 年度＞ ・指定校の検討（～5 月） ・学科教員の合意による方針の策定（～10 月） ・機会を捉えた積極的な情報発信（随時）
目標達成を測 定する指標	＜令和 3 年度＞ ・現行実施の広報関係企画の評価作成、課題の抽出 ・令和 3 年度入試志願者状況
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・学科内での議論を踏まえ、適切に指定校を選定した。 ・次年度入試に向けた、指定校の選定法に関する議論を行った。 ・指定校入試により 35 名が入学し、その他の入試制度も含め、入学定員の 1.05 倍の入学者の確保が見込まれる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科内での指定校選定に関する十分な議論ができています。
	【特色】 ・過去の入学者実績による地域の選定と入学者に必要な学力を担保するために該当高校の偏差値を絞った指定校選定により、学力を伴う入学者の確保ができています。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・次年度以降、入学者確保にさらに難渋することが予想されるため、宣伝を以下に行うかが重要となる。
	【課題】 ・適切な入試広報の選定と実施
根拠資料名	入試委員会資料、学科会議資料

学部・研究科名 生物産業学部
学部長・研究科委員長名 吉田穂積
学科名・専攻名 食香粧化学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	■新教育カリキュラムの設定 学部・学科のアドミッションポリシーに基づく新しい教育カリキュラムへの改正に向けて、学部共通の学科横断的体験型プログラム等を踏まえ、その中で、天然資源および食品や香粧品素材の性質や製造原理など基礎から応用まで総合的な学びに重点を置いた学科の特色・専門性をより活かせる学科専門カリキュラムを策定する。	■学科プロジェクトの推進とヒカル学生の創出 1年生、2年生に向けた「食・香・粧」領域を取り扱う学科のプロジェクトを設定し、有志学生を募り、研究活動のフックとなるような気付きを涵養する。モチベーションの高い学生のニーズに応えるプロジェクト設定により、学生のやる気の継続と充実感の向上を図る。キャンパス見学会や収穫祭、SNS等のチャネルによる成果発表により、学生保護者や受験者にも訴求する好循環を形成する。 地域に貢献する学生を創出する。	
実行サイクル	2 年サイクル（令和 3 年～ 令和 4 年）	2 年サイクル（令和 3 年～令和 4 年）	年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	・現行カリキュラムの問題点抽出 令和3年6月～12月 ・科目担当者再編 令和3年11月～令和4年12月 ・カリキュラムを実行する人員配置と研究室構成検証 令和4年1月～3月 ・学科3ポリの検証・再編 令和4年4月	・学科プロジェクトの設定と募集（4月） ・プロジェクトの開始（4月～随時）	
目標達成を測定する指標	＜令和3年度＞ ・授業担当者と担当時間一覧	＜令和3年度＞ ・学生ビールプロジェクト（4月～）熊谷喜八道場（7月～）、学生ワインプロジェクト（5月～）、学生アロマプロジェクト（6月～）、学生コスメプロジェクト（9月）のみの開始に留まった。各プロジェクトのSNSが指標。	
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	化粧の化学研究室内の教員補充ができ、科目担当者のバランスがはかられたものの、食の化学研究室内の教員異動により、欠員を生じたため教員の補充が求められると共に、科目担当者の再編が必要となった。	新型コロナによる構内閉鎖もなく、無事プロジェクトの募集と遂行ができた。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・日本で唯一の食、香り、化粧を学べるカリキュラムである	【長所】 ・プロジェクト参画によりガクチカが高まる	【長所】 ・
	【特色】 ・実習科目について、低学年では体験型内容を高学年では原理や操作の習熟を目標としたシラバス構成とし、学びの興味を抱かせ、年次が進むに従い興味の探求を深化させるシラバス構成を目指している。	【特色】 ・学生コスメプロジェクトでは、クラウドファンディングで目標を160%超える支援金を集め、無事返礼品を発送すると共に、余剰分は網走市に寄付できた。	【特色】 ・

現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・金曜日を共通科目実施日として設定し実験実習を行った結果、曜日によって3限始まりに出来ない時間割の問題が課題 ・化粧品、香料の関連科目設定（食品重視からの移行）	【問題点】 ・募集を早期に行うと、成績不良で退会者が多くなり、プロジェクトが成績向上の動機付けにならず、むしろ挫折感を与えてしまう。	【問題点】 ・
	【課題】 ・新カリで対応。	【課題】 ・募集タイミングに配慮の必要がある。 ・教員負担軽減の方策 ・麦やホップ栽培での寒冷地農場の継続的な協力体制	【課題】 ・
根拠資料名	・学科実験実習スケジュール ・学科会議議事録	・各プロジェクトのSNS ・プレスリリース ・新聞記事	

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	■連携協定や共同研究等を活用した研究プロジェクトの実施と国際化 学科の専門性を活かした食品、香料および化粧品をテーマとする連携研究プロジェクトを関連企業あるいは研究機関と企画・実施するとともに、この研究成果を学科の学生教育及び地域・社会等に広く還元する。 共同研究の対象を海外研究機関に広げ、研究の推進と国際交流を促進する。		
実行サイクル	<u> 3 </u> 年サイクル（令和 1 年～令和 3 年）	<u> </u> 年サイクル（平成 年～ 年）	<u> </u> 年サイクル（平成 年～ 年）
実施スケジュール	<令和2年度> ・取り組み内容の検討（～6月） ・連携研究プロジェクトの策定（～8月） <令和3年度> ・サントリーグローバルイノベーションセンターとの共同研究協議（4月～12月） ・包括連携協定締結の付議と共同研究3件（複数研究室、他学科横断的研究体制）の構築（令和4年2月）		
目標達成を測定する指標	・全学審議会資料、全学教授会資料		
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更

目標に対する現状説明	＊網走市新製品開発事業 冷凍ホタテのツーフローズン技術の開発（マルキチ）山崎 ＊コーケンフード&フレーバー(株)、ホタテ加工副産物の素材化・山崎 ＊(株)マルキチ・ホタテ加工自動化に関する装置開発・山崎 ＊（株）DHC ・プラセンタの機能性に関する研究・丹羽 ＊ 和弘食品（株）自然な出汁香るエキス創出に関する研究・妙田 ＊湧永製薬（株）熟成ニンニク抽出液のにおいに関する研究・妙田 ＊サッポロビール（株）ビールテイスト飲料における Polaris 香気の効果に関する研究・妙田 ＊サントリーグローバルイノベーションセンター（株）飲料等複雑味特性評価方法、分析方法に関する研究・妙田 ＊アルビオン（株）・北見工業大学 脳波測定技術を用いた化粧品の効果測定に関する研究・妙田 ＊アルビオン（株）スリランカにおける化粧品原料および伝統的な薬草に関する研究・妙田、宮下 ＊北見工大分析センター NMR 検出感度の検討 のじま ＊北見工大服部先生 セスキテルペンの構造解析 のじま ＊物産フードサイエンス、東京農工大 オリゴ糖の機能性 遠藤 ＊タカナシ乳業 乳酸菌・ビフィズス菌の機能性 遠藤 ＊トゥルク大学（フィンランド）、アストゥリアス乳生品研究所（スペイン） 腸内細菌と健康 遠藤 ＊国立遺伝学研究所 乳酸菌・ビフィズス菌のゲノム解析 遠藤 ＊平塚製菓 国産カカオの発酵に関する研究 遠藤 ＊サントリー ウィスキー乳酸菌の環境適応 遠藤 ＊アピ ミツバチ乳酸菌の利用 遠藤		
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・原料生産に近接しているため、生物資源を食、香、粧の領域に幅広く展開出来る強みがある	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・研究室間連携により効率的かつ効果的なアプローチができる	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・共同研究広報を受験生獲得に繋げる	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	共同研究契約書 委託研究契約 寄付金		

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標			
実行サイクル	_____年サイクル（平成 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール			
目標達成を測 定する指標			
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明			
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名自然資源経営学科

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	■教育カリキュラムの改善に向けた検討 2019 年度のカリキュラム改正による教育研究活動の実施状況と効果を検証し、次期のカリキュラム改正に向け、学科のカリキュラムポリシーを実現しうる設置すべき科目について検討する。また、実学を重視した学科の特色・専門性を活かせる魅力的なフィールドワークや体験重視のプログラムを検討する。
実行サイクル	3 年サイクル（2020 年～2022 年）
実施 スケジュール	1) 学生向けの授業や実習に対するニーズ調査（2021 年） 2) 自然資源経営学実務演習の整備（2022 年） 2) 次期カリキュラムに向けた具体的な学科の専門科目（2022 年）
目標達成を測 定する指標	実施した実績
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	2022 年 2 月 26 日～3 月 6 日にかけて Forms を使った学生アンケートを実施して、本学科の授業や実習（実務演習やゼミ研修を含む）に対するニーズを把握した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 本学科の特色である実習内容の評価を把握することができた。
	【特色】 現状のみならず、将来的な期待についても把握することができた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 学生向けのニーズ調査の回答数が 57 名（15％）とやや少なかった。
	【課題】 次期カリキュラムにおける自然資源経営学実務演習の位置づけや実施体制の整備。
根拠資料名	アンケート結果

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	■地域創生・地域振興にかかわる研究プロジェクトの実施 研究室および教員の知財の活用、また他学科研究室との連携、そして東京農業大学・生物産業学部が締結した産官学金労による多様な包括連携協定なども活用し、地域創生・地域振興に資する研究プロジェクトを企画・実施する。また、この研究成果を学科の学生教育及び地域・社会等に広く還元する。
実行サイクル	3 年サイクル（2020 年～2022 年）
実施 スケジュール	1）福島イノベーション・コースト構想推進事業（福島県浪江町）「福島県浪江町における農業“新興”に向けた取り組み」の実施（2020 年）※21 年度からは大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業として「インターンシップ型農業・農村総合活性化戦略プロジェクト」を実施 2）茨城県阿見町：受託事業「阿見町農業振興ビジョン」策定 3）茨城県行方市：「令和 3 年度行方市 6 次産業化シンポジウム」の実施 4）農業女子プロジェクト：クロスプラス（企業）と連携した農作業着の開発とイベント（コロナ禍により中止） 5）学部長主導型プロジェクト（2020-21 年）「地域主体のアザラシの循環型順応的管理システムの構築を目指して」
目標達成を測定する指標	・実施した実績
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1）2021 年度は本学科の教員 4 名、学生 8 名が参加して、浪江町復興支援事業に参加した。コロナ禍により 10 月以降、5 回にわたり現地での活動に参加した。 2）2021 年度は本学科の教員 1 名が、農業振興ビジョンの策定に参画した（「阿見町農業振興ビジョンに関する調査業務」）。 3）2021 年度は本学科の教員 1 名が、「令和 2 年度行方市 6 次産業化シンポジウム」の運営に参画した。 4）2021 年度は本学科の教員教員 1 名が企画に参画し、企業と連携した農作業着の開発とイベントを計画したが、コロナ禍により中止となった。 5）2021 年度は本学科の教員教員 2 名が（本キャンパス学科横断型）プロジェクト「地域主体のアザラシの循環型順応的管理システムの構築を目指して～アザラシの生態系サービスと有効利用の可能性を探る～」に参画し、2 月に本年度の研究報告会を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 全般的に、本学科所属教員の専門性を活かし地方創生に貢献できる。
	【特色】 全般的に、学生が参加できるような体制になっている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 全般的に、学生がプロジェクトに参加する際、通常講義への出席とプロジェクト参加のスケジュール調整が難しい
	【課題】 多くの学生が参加できる体制を整える
根拠資料名	1）事業の実績報告書 2）阿見町との打ち合わせ資料「阿見町農業振興ビジョン」 3）令和 3 年度行方市 6 次産業化シンポジウム実施要項 5）研究報告会プログラム

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	■受験生（学生）確保に向けた取り組み ディプロマポリシーに沿った高い目的意識を持つ受験生を確保するために、大学・学部全体による広報・募集活動に加えて、学科独自の取り組みとして学科の教育研究の魅力を受験生に限らず広く社会に情報発信する広報活動を実施する。
実行サイクル	3 年サイクル（2020 年～2022 年）
実施 スケジュール	1）学科の研究教育を紹介する動画の作成（2020 年 7 月） 2）大阪府大阪高等学校との高大接続事業の取り組み（2020～22 年度） 3）「私の夢北海道」入試向けの学科独自の DM の作成および学科オリジナルサイトの作成（2021 年） 4）学科独自パンフレットの作成（2022 年）
目標達成を測 定する指標	1）動画視聴回数 2）受験者数 3）配信数と受験者数
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1）学科の研究教育を紹介する動画の作成し、Web オープンキャンパスで参加者に視聴してもらった。また、大学ホームページに掲載し、自由に視聴できる環境を整えた。 2）2020 年度はオンラインでの模擬講義の実施を行ないながら事業構想を練り、数回にわたる高校での現地打合せをおこない、21 年度は 7 月のオープンキャンパスに高校生が参加することで本学部本学科の学びを体感し、受験につなげることができた。 3）「私の夢北海道」入試向けの学科独自の DM を作成し、受験者の確保に努めた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 1）動画を配信することで、時間的空間的な制約なしに学科の学びの魅力を知ってもらうことができる 2）高校の教員との積極的なコミュニケーションによって、高校生に対して学科の学びの魅力をより訴求できる活動になっている 3）学科の卒業論文テーマなど、学科の学びを伝えられる内容になっている。
	【特色】 1）在籍する学生も登場してもらい、リアリティーのある学科の学びを紹介している 2）大阪高校だけでなく、その関係する周辺高校に対しても事業内容が発信されている
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 広報活動全般として、学生目線での学科の教育・研究の魅力をより一層発信すること
	【課題】 広報活動全般として、情報発信の適切な方法を検討すること（複数の SNS 等）
根拠資料名	1）大学ホームページでの視聴回数（2020/10/13 配信、2021/03/23 現在 1,825 回視聴） 2）出張報告書 3）「私の夢北海道」入試向けの学科独自の DM